

- 線④「かぶりを振って」の意味として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。  
ア 頭を左右に振って否定を表して、イ 手を左右に振って拒否を表して、  
ウ 首を上下に振って肯定を表して、エ 帽子を上下に振って感謝を表して、

- 本文中の[A]、[B]にそれぞれ当てはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。  
ア (A) だが B そのため) イ (A) だから B しかし) (I  
ウ (A) ところで B ようやく) エ (A) それでも B ところが) (J

- 線①「全然とんちんかんな答え方」とあるが、少年の「答え方」が「とんちんかんな」理由について説明したものとして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。  
ア 定期を選ばないのは母親と相談したことなのに、説明せずに逃げ出してしまったから。  
イ 病院に通う目的がお見舞いであることは、より安価な定期を選ばない理由にならないから。  
ウ 定期を買うか回数券を買うかは少年の自由であり、運転手に理由を説明する必要がないから。  
エ 病院に通う回数券を正しく計算できなくて、後に回数券が不足することになってしまったから。

- 線②「最後の回数券」とあるが、文中には、最後の一枚の回数券を使うことになる切なさから涙を浮かべる少年の様子が間接的に表現されている一文がある。その一文として最も適当な一文を文中から抜き出し、その最初の三字を書きなさい。  
ふっくらぼん

の表の [a] [b] に当てはまる最も適当な言葉を書きなさい。ただし、[a] は十五字で、[b] は六字で、それぞれ文中からそのまま抜き出して書くこと。	新しい回数券を買うことで、[a] と感じて涙を流している。 [b] かつてしまう。
声を掛けられる前	これまで [b] な様子で怖い存在だった河野さんに不意に優しくされ、緊張の糸が切れて涙がこぼれた。
声を掛けられた後	

(五)

次の文章を読んで、1～4の問いに答えなさい。

ある諸侯の姫君、御腹痛ませたまふとて、医師どもに針治せられけるに、いつれの針も痛みたまふとて打たせたまはず。しかるにある町医がむすこ、いまだ年若きが、このよし聞きおよびて、おのれ痛まぬやうに針打ちまるらすべきと申し出ければ、やがて召させたまひて、こころみさせたまひけるに、少しも痛みたまはねば、二三度打たせられけるに、ほどなくさはやぎたまひぬ。よりのこの医師、祿たまはり召しかかへられたり。このとき父の医師、あやしみて言ひけるは、なんぢいかなる人にその術を学ばて、姫君の御腹痛まぬやうには打ちけるぞと問はれければ、むすこ答へて言ふ、姫君の御腹は、しばしの間の事にて、自然と治癒すべきなり。さればおのれは、筒ばかり御腹にあてて、針打つまねして、まことには打ちたてまつらすぞぞ。 (『野乃舎隨筆』より)

- (注1) 諸侯：大名。
- (注2) 針治：体に針を刺しておこなう治療。針の入った細い筒を、筒ごと体にあてて針を刺す。
- (注3) やがて：すぐに。
- (注4) さはやぎたまひぬ(痛みが) おさまりなされた。
- (注5) 祿：俸禄。賃金のこと。

筒を打つまねしては打たない

- 線②「痛まぬやうに」を現代仮名遣いに直し、すべて平仮名で書きなさい。  
いたまぬよう
- 線①「このよし」とは「この事情」という意味である。これは、町医のむすこが聞きつけた話であるが、その内容を説明したものとして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。  
ア 腹痛をわずらった姫君が、医師たちに針治療をされたが、刺す針が痛くて治療させなかつたという話。  
イ 腹痛をわずらった姫君が、医師たちに針治療をされたが、かえって腹の痛みが増してしまつたという話。  
ウ 腹痛をわずらった姫君が、医師たちに針治療をされたが、どの医師も姫君を恐れて逃げだしたという話。  
エ 腹痛をわずらった姫君が、医師たちに針治療をされたが、治療用の針が古くて治療できなかったという話。

- 線③「言ひけるは」とあるが、このとき父の医師が言った言葉を文中からそのまま抜き出し、その最初と最後のそれぞれ三字を書きなさい。  
なんぢがけなむ

- 次の会話は、この文章を読んだAさんとBさんが、先生と一緒に、町医のむすこが姫君にほどこした治療について話し合った内容の一部である。会話の中の[a]、[b]、[c]に当てはまる適当な言葉を書きなさい。ただし、[a]は、最も適当な言葉を文中から六字でそのまま抜き出して書くこと。また、[b]は、文中から三十二字でそのまま抜き出し、最初と最後のそれぞれ四字を書くこと。また、[c]は、十字以上十五字以内の現代語で書くこと。

Aさん 「何人もの医師が治療できなかった姫君の腹痛を、町医のむすこは見事に治すことができました。」  
Bさん 「[a]」とあるように、まだ治療の経験も浅そうな医師なのに、どうしてそんなことができたのでしょうか。」  
Aさん 「そもそも、町医のむすこは『b』と言っているから、実際には針治療をしていないのですね。」  
Bさん 「姫君の腹痛が、[c]ということを知っていたので、そもそも針治療の必要がないと考えたのですね。」  
先生 「そうですね。町医のむすこは、治療の経験は浅かったかもしれませんが、患者の容態を見る力があつたのでしょうか。」

a. ちまた年若き  
b. 筒ばかりまつらす

c. 少したてば、自然に治るものだ。

(二)

- 次の1~4の各文の——線の部分の読み方を平仮名で書きなさい。
- 1 会場が拍手喝采で包まれる。
  - 2 どのような相手にも真摯に向き合う。
  - 3 学ぶことの大切さを悟る。
  - 4 リビングにソファを据える。

ナント

す

(三)

- 次の1~4の各文の——線の部分を漢字で書きなさい。ただし、必要なものには送り仮名を付けること。
- 1 物質をねんしようさせる実験。
  - 2 利益を二人でせつばんする。
  - 3 ころよい風が吹く。
  - 4 事件を公平にさばく。

快

裁く

折半

(四)

次の文章を読んで、1~5の問いに答えなさい。

次の日、バスに乗り込んだ少年は前のほうの席を選び、運転席をそと覗き込んだ。あのひとだとわかると、胸がすぼまった。

初めてバスに一人で乗った日に叱られた運転手だった。その後も何度か、同じ運転手のバスに乗った。まだ二冊目の回数券を使い始めたばかりの頃、整理券を指に巻きつけて丸めたまま運賃箱に入れたら、「数字が見えないとだめだよ」と言われた。叱る口調ではなかったが、それ以来、あのひとのバスに乗るのが怖くなった。たとえなにも言われなくても、運賃箱に回数券と整理券を入れてバスを降りるとき、いつもムスツとしているように見える。

嫌だなあ、運が悪いなあ、と思ったが、回数券を買わないわけにはいかなかった。『大病院前』でバスを降りるとき、「回数券、ください」と声をかけた。

運転手は「早めに言ってくれないと」と顔をしかめ、足元に置いたカバンから回数券を出した。制服の胸の名札が見えた。「河野」と書いてあった。

「子ども用のでいいの？」

「……はい」

「……百二十円の」

「河野さんは」だから、そういうのも先に言わないと、後ろつつかえてるだろ」とぶつきらぼうに言うて、一冊差し出した。「千二百円と、今日のおん、運賃箱に入れて」

「あの……すみません、三冊……すみません……」

「三冊も……」

「はい……すみません……」

大きくため息をついた河野さんは、「ちょっと、後ろのお客さん先にするから」と少年に脇にどくよう顎を振った。

少年は頬を赤くして、他の客が全員降りるのを待った。お父さん、お母さん、お父さん、お母さん、と心の中で両親を交互に呼んだ。助けて、助けて、助けて……と訴えた。

客が降りたあと、河野さんはまたカバンを探り、追加の二冊を少年に差し出した。代金を運賃箱に入ると、「かよってるの？」と、さっきよりさらにぶつきらぼうに訊かれた。「病院、かよらんだら、定期のほうが安いぞ」

(5b)

かほそい声で応え、そのまま、逃げるようにステップを下りて外に出た。全然とんちんかんな答え方をしてたことに気づいたのは、バスが走り去ってから、だった。

(中略)

買い足した回数券の三冊目が——もうすぐ終わる。少年は父に「迎えに来て」とねだるようになった。車で通勤している父に、会社帰りに病院に寄ってもらって一緒に帰れば、回数券を使わずにすむ。

「今日は残業で遅くなるんだけどな」と父が言っても、「いい、待ってるから」とねばった。母から看護師さんに頼んでもらって、面会時間の過ぎたあたりも病室で父を待つ日もあった。

「A」行きバスで回数券は一枚ずつ減っていく。最後から二枚目の回数券を——今日、使った。あとは表紙を兼ねた一枚目の券だけだ。

明日からお小遣いでバスに乗ることにした。毎月のお小遣いは千円だから、あとしばらくはだいじょうぶだろう。

「B」迎えに来てくれるはずの父から、病院のナースステーションに電話が入った。「今日はどうしても抜けられない仕事が入っちゃったから、一人でバスで帰って、って」

看護師さんから伝言を聞くと、泣きだしそうになってしまった。今日は財布を持って来ていない。回数券を使わなければ、家に帰れない。

母の前では涙をこらえた。病院前のバス停のベンチに座っているときも、必死に唇を噛んで我慢した。でも、バスに乗り込み、最初は混み合っていた車内が少しずつ空いてくると、急に悲しみが胸に込み上げてきた。シートに座る。窓から見えるきれいな真ん丸の月が、じわじわとにじみ、揺れはじめた。座ったままうずくまるような格好で泣いた。バスの重いエンジンの音に紛らせて、うめき声を漏らしながら泣きじゃくった。

『本町一丁目』が近づいてきた。顔を上げると、車内には他の客は誰もいなかった。降車ボタンを押して、手の甲で涙をぬぐいながら席を立ち、ウインドブレーカーのポケットから回数券の最後の一枚を取り出した。

バスが停まる。運賃箱の前まで来ると、運転手が河野さんと気づいた。それでまた、悲しみがつのった。こんなひとに最後の回数券を渡したくない。

整理券を運賃箱に入れ、回数券をつづけて入れようとしたとき、とうとう泣き声が出てしまった。

「どうした？」と河野さんが訊いた。「なんで泣いてるの？」——ぶつきらぼうではない言い方をされたのは初めてだったから、逆に涙が止まらなくなってしまった。

「財布、落としちゃったのか？」

泣きながらかぶりを振って、回数券を見せた。

「じゃあ早く入れなさい——とは、言われなかった。」

河野さんは「どうした？」ともう一度訊いた。

その声にすうつと手を引かれるように、少年は嗚咽交じりに、回数券を使いたくないんだと伝えた。母のこともしゃべった。新しい回数券を買って、そのぶん、母の退院の日が遠ざかってしまう。ごめん、ごめん、ごめん、と手の甲で目元を覆った。警察に捕まってもいいから、この回数券、ぼくにください、と言った。

河野さんはなにも言わなかった。かわりに、小銭が運賃箱に落ちる音が聞こえた。目元から手の甲をはずすと、整理券と一緒に百二十円、箱に入っていた。もう前に向き直っていた河野さんは、少年を振り向かずに、「早く降りて」と言った。「次のバス停でお客さんが待ってるんだから、早く——」

声はまた、ぶつきらぼうになっていた。(重松清『バスに乗って』『小学五年生』所収 文春文庫刊より)

(5a)

(一) 次の文章を読んで、1～8の問いに答えなさい。(1)～(8)は、それぞれ段落を示す番号である。

1 僕は指揮をまったくの独学で身につけた。a よう a まねで、いつてみれば本能に任せて腕を動かしていた。

2 それでも指揮法を習おうとしたことはあったのだ。A、目の前に演奏者のいないところ、音楽の流れがないところで、ただ腕を動かしたりしていることが実にむなしく思えて、すぐにやめた。だから実際のところ、僕はどんなふうにも腕を動かすかなど、今まで考えたことがない。

3 自分が音楽大学の指揮科で学んでいないから言うわけではないが、音楽大学の授業で腕の動かし方を練習していたとしたら、それはまったく無駄な時間だと僕は思う。それならば、その時間を、楽器を弾くことに費やしたほうがいい。合唱団で歌う時間に当てたほうがいい。

4 日本の指揮法は、言ってみれば、日本舞踊的だ。要するに、あらかじめ型が決まっています、まず型から入ることが重要視される。型が教科書としてあるため、教えやすく学びやすい。そこには秒単位でも時計の針が狂わないような、日本人特有の律儀さがある。

5 だからだろう、フレージの出だしのタイミングやテンポの指示を明確に表現できる指揮者が日本からは数多く出てきた。指揮者コンクールでも、その部分がいかに正確かで評価されている側面がある。

6 そういう指揮へのアプローチはあるのかもしれないが、それは指揮の本質とはまったく関係がない。

7 確かに指示が明確であれば、オーケストラは同時に音を発して、同時に終わることができるだろう。あるいは同じテンポで演奏できるだろう。大事なことはあるが、それは指揮の入り口であって、音楽のよさ(びや響かさはまったく違うところ)にあり、もっとうつと先にある。あえて言うならば、それらができない指揮者で、すばらしい指揮者は山ほどいる。

8 経験を重ねていくと、指揮にとって手の動きそのものは実は大した意味を持っていないことがわかる。

9 指揮者はオーケストラが鳴らす音を聴きながら、常に三つのことを同時に判断していなければならない。

10 まず、これから何を鳴らすかという指示。それは振り上げた腕が降りてくる瞬間、次はどこに行くかという方向性を与える。

11 そうした動きをしながら、耳は今の瞬間に鳴っている音に対して反応しなければならない。

12 そして三つ目、実際にどういった音が鳴ったという過去を知らなければ、次につくる音楽が組み立てられない。

13 未来と現在と過去。この三つを瞬時に判断するのは当然、目ではなく、耳だ。この三つが入り組んで、音に酔ってしまうと、いい音楽はつくれない。だから、たとえ指揮台の上で飛んだり跳ねたりしていても、指揮者は二重人格、三重人格のように、どこかで冷めた耳を持っている必要がある。

14 そして、最も指揮者にとって大切なのは、「自分の音」を実際にどう鳴らすかだ。僕は二〇代の終わりから三〇代にかけてヨーロッパや日本で、指揮者としての「自分の音」を求めて成功と失敗を繰り返した。自分の音をどうオーケストラに伝え、表現するか。指揮者として成長するために、その一〇年間はとてつもなく大きかった。

15 音楽は空気を振動させて鳴る音でしかない。作品に仮に「水」という標題がついていても、結局それは音の連なりでしかない。自分が作品に一步踏み込み、作品が自分に近づいてきたとき、ある情景、イメージが立ち上がる。それをオーケストラに伝えるとき、言葉にして伝えることがとても大切になる。

(中略)

17 ここで大事なのはオーケストラの想像力だ。もしもオーケストラに想像力がなく、それぞれが演奏に消極的にしか参加しなければ、決していい音は鳴らない。だからこそ指揮者はオーケストラの

想像力を呼び起こすように、イメージを言葉で表現して伝える必要がある。  
18 B、一つの静かなフレージも、それが透明感のある静けさなのか、安らぎをたたえた穏やかな静けさなのか、あるいは爆発前の何かを秘めた静けさなのか、的確に表現して伝えることが求められる。  
(佐渡 裕『棒を振る人生』PHP研究所より)

(注1) フレージは旋律のひと区切り。  
(注2) アプローチここでは、研究の手立てのこと。

1 段落の——線①「独学」と熟語の構成(組み立て)方が同じものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。  
ア 除濕 イ 携帯 ウ 仮定 エ 不安

2 1 段落の——線②「a よう a まね」が、「他人のすることをまねて覚えること」という意味の言葉になるように、a に当てはまる同じ言葉を、漢字一字で書きなさい。

3 7 段落の——線⑤「あえて」の品詞名を漢字で書きなさい。

4 2 段落の A、18 段落の B にそれぞれ当てはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。  
ア (A) (B) B たええ (イ) (A) (B) なせなら (ウ) (A) つまり B ただし (エ) (A) (B) けれども B それとも (見)

5 6 段落の——線③「指揮の本質」、7 段落の——線④「指揮の入り口」とあるが、筆者の考える指揮のあり方についてまとめた次の表の a、b、c に当てはまる最も適当な言葉を書きなさい。ただし、a は十一文字で、b は十五文字で、c は五文字で、それぞれ 4、7 段落の文中からそのまま抜き出して書くこと。a. 音楽のよさ(びや響かさはまったく違うところ)にあり、もっとうつと先にある。

指揮の本質	a
指揮の入り口	オーケストラが b ことであつたり、c で演奏できたりすること。

6 9 段落の——線⑥「三つのこと」は、何を指しているか。最も適当な言葉を、8、13 段落の文中から八文字でそのまま抜き出して書きなさい。未来と現在と過去

7 14 段落の——線⑦「最も指揮者にとって大切なのは、「自分の音」を実際にどう鳴らすかだ」について、「自分の音」を鳴らすために大切なことについて説明した次の文章の a、b に当てはまる最も適当な言葉を書きなさい。ただし、a は九文字で、b は七文字で、それぞれ 14、18 段落の文中からそのまま抜き出して書くこと。

8 本文に述べられていることと最もよく合っているものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。ある情景、イメージ、言葉が表現して

ア 指揮者には、型にのつた教科書のような正確な手の動きが必要である。  
イ 指揮者には、音に酔ってしまうと、音を判断する冷めた耳が必要である。  
ウ 指揮者には、指揮台の上でオーケストラに向けての情熱的な表現こそが必要である。  
エ 指揮者には、オーケストラを自分の意のままに操るための一〇年以上の経験が必要である。